

学校をまつりの場に ～宮城学院クリスマスマーケット企画運営～

間瀬 幸江
MASE Yukie
宮城学院女子大学
ymase@mgu.ac.jp

「宮城学院クリスマスマーケット」(以下MGCMと略記する)は、2016年12月18日(日)に第三回目が開催された。大学組織の一部門である社会連携センターを事務拠点としつつ、主催は学校法人宮城学院、実働スタッフとして一部教員による実行委員会が組織されている。来場者数は初回の850人から第三回の1600人へと右肩上がりである。大学内でもイベントへの認知度は高まり、2017年の第四回開催もすでに確定している。また、学生ボランティアスタッフ数は、初回が80人、第二回が145人、第三回が174人と飛躍的に増えている。

MGCMの始動目的は大学のブランディングにあった。そのため、開催理念から個別のプログラムの策定にいたるまで教員主導で、学生スタッフは実質的にその手足であった。教育的配慮としての試行錯誤を許容するゆとりがなかった。第三回からはスタッフ参加がポイント制の専門科目の一メニューに加わり、形の上ではキャリア教育の一環に位置付けられたものの、今後の継続にあたっては、運営形態を名実ともに教育的価値のあるものへと刷新させたい。

第三回には、縁あって、慶應義塾大学國枝孝弘研究室(7名)と、弘前大学の熊野真規子先生主導の〈弘前×フランス〉プロジェクト(8名)の学生が、スタッフ兼オブザーバーとしてイベントに参加、さらにマーケットの前日には、宮城学院の「中庭プロジェクト」のメンバー10人(いずれもMGCMの学生スタッフ)とともに、大学間交流会が持たれた¹。

RPKのアトリエは、二大学の代表5名(弘前大学からは上野由加里さんと高木雄基さん、慶應義塾大学からは折井伸之輔さん、藤谷悠さん、野口実里さん)をコメンテーターに迎え、まずMGCMの沿革に触れ、イベント開催後にMGCM学生全スタッフを対象に行われたアンケート結果ならびに三大学からのふりかえりレポートを踏まえた企画運営上の問題点の整理を行うとともに、三大学交流会を経て作られた、宮城学院女子大学の学生スタッフからの新提案を読み上げる形を取った。本報告ではさらに、2017年度から宮城学院で始まる学生主導の新企画に言及する。教員主導で急ごしらえされパッケージ化された「魅力」に惹かれてスタッフになった学生のうち数名が、その「魅力」を今度は自らの言葉で問い直そうとしている。

¹ 右レポート参照。「外国語学習から異文化学習へ～フランス語教員たちが作るマーケット&交流企画～」白水社『ふらんす』2017年1月号。

竜頭蛇尾のプロジェクト：端緒と問題点

MGCM は、ミッション系、女子教育、創立から 130 年の歴史をもつ地域色の強い伝統校、という宮城学院女子大学の三つの特徴が相互乗り入れを果たす場として構想された。この三つの要素に共通しているのは、その今日的価値をめぐる実践的議論の不足あるいは不在である。21 世紀におけるキリスト教主義教育とは？ 女子だけの大学の存在価値とは？ 教育機関の歴史と伝統は、教育実践の現場にとって何か？ この三つの、答えを絞り込めぬ問題を、クリスマスという、これもまたその商業的価値以外の価値が日本で再考されることのない文化的枠組みの中で、実践を積み重ねながら問い続けること。そうした議論の磁場をまずは作るために、MGCM では、いろいろなものの垣根を超える、または取り払うための仕組みを想定した。まず、専門性の垣根を超えるため、ボランティアスタッフは学科を問わず全学から募る。また、宮城学院の卒業生でありかつ地域で活躍する人々に声をかけ、学生スタッフとの連携を目指すことで、地域と大学、大学の過去と現在、未来をつなぐことを念頭においた。こうした配慮が功を奏したのか、来場者アンケートには、イベントを絶賛し継続を強く望む文言が連なっている。地域のニーズに見合ったイベントに育っているとと言える。

しかし、学生ボランティアのアンケートには、「直前まで、何を売るか知らされなかったの、当日あたふたした」「ものすごく忙しくて、最後まで走り回った感じ」「準備も片付けも大変だった。椅子や机の出し入れがすごく大変だった」「スタッフのなかに、やる気のある人とない人の差が大きい」などと、組織運営の問題点に対する不満の声が連ねられた。また、満足だった点としては「品物を全部売り切るとてもやりがいを感じた」「お客様に笑顔で「ありがとう」と言われて嬉しかった」「違う学科の人と友達になれた」「子どもたちがすごく楽しそうであった。いい意味で非日常的」など、当日の印象やノルマの達成などの浅薄なものが多く、「お店の人との打ち合わせは難しかったけれどもうまくいった」「自分たちでアイデアを出し合って、準備しながらだんだんとチームワークができた」といった、主体的な実践を踏まえた具体的な感想は一部に限られている。

イベントの当事者としての建設的な感想よりも、表層的または感情的な感想が多かったのは、教員主導ゆえにイベントの「外壁」の塗装に腐心したあまりに、学生スタッフの主体的参加の芽を育む姿勢がなかったからである。実際、弘前大学、慶應義塾大学のメンバーからは、「教員やごく一部のリーダー格の学生だけが忙しそう」「学生スタッフの数だけが多ければいいということではない」との指摘があった。しかも、参加してよかった理由として「販売ノルマの達成」を挙げた学生には、無批判に歯車として働くことを、暗に肯定させるような経験となっではしまわなかったか。「来年もボランティアスタッフとして参加したいですか」との設問（3 年生以下のみ回答）に対して「参加したい」と回答した 71%のスタッフに代表される学生たち（「わからない」29%、「参加したくない」0%）に、大学は今後どのようにこたえていくべきか。現状の継続はフレイレの言う「考えさせないようにする」仕組み²の徒な継続ではないか。

弘前×慶應×宮城学院 三大学交流会

「慶應義塾大学國枝孝弘研究室」（以下「慶應グループ」と表記）と「(弘前×フランス) プロジェクト」（以下「弘前グループ」と表記）の MGCM へのスタッフ参加の決定を受け、前日

² パウロ・フレイレ『被抑圧者の教育学』三砂ちづる訳（亜紀書房、2011 年）、212 頁。「支配者の観点で考える唯一の思考の形態は、人々を考えさせないようにすることであり、それはつまり人々と共に考えることなどない、ということである。どの時代にあっても、支配者というものはいつもそうであった。人々がともに考えることを許さなかったのである」

に行う交流事業について、二大学に企画運営を託した。両大学にはすでに交流事業の実績があり、特に、事前にテーマを決めて行なう学生同士の意見交換会（グループディスカッション）が、自らの意見を咀嚼し表明する興味深い成果を収めていることから、同様の交流会を開催することとし、また、交流会の前段には、〈弘前×フランス〉プロジェクトの、パワーポイントによる成果発表も含めた。交流会のテーマの策定をはじめとする事前準備には、両大学の学生が関わった。

交流会のテーマは「国際交流に関する個人的な経験を述べあう」。両大学がすでに「国際的」であることを念頭におく学びを深めてきていることに加え、宮城学院側の参加学生が国際文化学科や英文学科という、日本の外を見つめる専門領域の学生であったことから策定されたテーマであった。当日は、全体を、5～6人の大学混合グループに分けて、自由にディスカッションを行った。いわゆる、「東北の有名国立大学」と、「私学のトップ大学」の学生たちとの交流会ということで、果たしてうまくいくのか、正直なところ不安もあった（二大学の学生たちにも、交流会に初参加する宮城学院の学生たちがディスカッションにうまく参加できるのかどうか不安を抱いていた人がいたと後で知った）。また、弘前グループ、慶應グループの学生のほとんどがすでに渡航経験を持っており、その意味で宮城学院の学生が萎縮しないかも心配だった。しかしこれらはすべて杞憂であった。これは、ひとつには、とりわけ慶應グループの参加者がすでにファシリテーターの経験を持っており、率先して聞き手としての構えを取ったことが大きい。さらに、交流会の直前に行われた弘前グループのプレゼンが、宮城学院の学生たちの内在的な異文化経験を意識化・言語化する呼び水となったことも重要である。かくして、宮城学院の学生たちは、「他大学の人たちのタメロで一気に緊張」をほぐされ、直前に見た、弘前グループによる、ボルドーで弘前をプレゼンした経験等のレポートに触発され、座学で学んだ宗教学や文化人類学を引用しながら、内在的な異文化の出会いについて自由に語っていた。

定型どおりに準備していた「自己紹介なしでディスカッションが始まり」面食らったがそのままスムーズに意見交換が続いていったという経験、「一つの考えに縛られず視野が広がり、関心や疑問をたくさん持つことが」できたという実感が、教員の直接的な関与なしに得られたことも、特筆に値する。「何を、どう話すか」ではなく、自分がすでに持っているどんな情報も他者にとって興味深いのだと思い至る瞬間ひとつひとつを過ごす学生たちの、それ以前に教場で見せたこともないような和やかな表情を、会場の片隅から遠巻きに眺めた経験は、教員として貴重だった。「教員がいかに、学生ひとりひとりの可能性の芽を摘み取っているか、学生同士の交流がどれほど学生を育て合うか、教員は自覚しなければならない」とは、ディスカッションの輪に入らず全体を見渡していた國枝先生の弁である。

MGCM 当日、両グループのメンバーには、手回しオルガンの管理をお願いし、来場者に自由に体験してもらったり、試演をしたりしてもらった。11時から17時までのイベント開催時間中、体験希望者は引きも切らず盛況であった。また、設営、撤収も精力的にご助力いただいた。心から感謝する。

MGCM 新企画への提言～交流会に触発されて～

交流会終了後、交流会とMGCMスタッフ体験について、三大学の学生からの感想を、國枝、熊野両先生にまとめていただき引き継いだ。さらに一般客からのアンケート結果を踏まえて、RPK2017で報告を行うこととなった。感想やアンケートを読んだ宮城学院の学生からは、アトリエのコメンテーターとしては参加できないが、交流会や大学を超えた協同体験を経験した立

場から、今後の MGCM のプログラムを新たに策定したいとの申し出があった。提出された二案はアトリエで慶應グループの野口さんに代読してもらった。提案の内容を抜粋して引用する。

1) 手回しオルガンを使って

来場者アンケートの中に「手回しオルガンがとても良かった」という意見が多くみられました。常にどこからか流れている不思議な音色や、子どもたちが楽しげに手回しオルガンを回す姿が良かったなど理由は様々でしたが、手回しオルガンは、実は宮城学院クリスマスマーケットの象徴だったのかなと思います。

- ・理念：手回しオルガンのあるところを、オススメ企画やクリスマスについての豆知識など MGCM に関連する内容を伝えられるインフォメーションスタンドにする。
- ・事前準備：手回しオルガンに当日関わるスタッフは、演奏方法や構造についてのレクチャーを事前に受ける。

2) ディスカッション企画「キリスト教（クリスマス）とは何か」

12月17日に3つの大学が集まって行った交流会のディスカッションがとても楽しかったので、あの形をつかって、宮城県内にあるミッション系大学の学生が何人があつまり、ディスカッションすると面白いと思います。ミッション系にするのは、普段からキリスト教に関する授業があり、クリスマスをルーツから考えることができる学生が多いからです。

- ・方法：2時間ほどで班ごとに意見をまとめ、プレゼンをする。
- ・チーム編成：大学ごとや学年ごとのチームを作ってみる。
- ・事前準備：ファシリテーターになるためのやり方を事前に学ぶ。

いずれの企画も単なる掛け声のようなものではなく、実現可能性を含んでいる。手回しオルガンはもともと、仙台市在住の制作者の厚意によって MGCM の一プログラムに組み入れられたが、来場者からもスタッフからも評判がよかった。これを「クリスマスマーケットの象徴として」位置づけたいという理念的な思い付きが、マーケットの「インフォメーションスタンド」として手回しオルガンを活用するという具体的な思い付きに連結されている。また、それを可能にするために、手回しオルガンについて事前にレクチャーを受け、当日だけのお飾りとしてのスタッフでいてはならないとの気づきも見て取れる。

手回しオルガンを、MGCM 全体のインフォメーションスタンドにする企画が、イベント全体の規模を見渡す具体的な仕組みだとすると、ディスカッション企画「キリスト教（クリスマス）とは何か」は、MGCM をめぐる理念的な把握を目指す仕組みだと言える。理念と具体とを連動させた二つの企画案が、吹き出すかのように学生たちから提出され、彼女たちの創意工夫の発露にこれまで蓋をしてきたと改めて知った。発露を促すきっかけとなったのが、代読によるものとはいえ、発表の場を積極的に与えて任せる姿勢にあったことも重要である。

クリスマスマーケットとは何かを問うプロジェクト～話す姿勢から、尋ね、聞く姿勢へ～

宮城学院女子大学には、学生の発案により社会活動を行うための「さなぎプロジェクト」という事業がある。2017年の第四回 MGCM に向けて、学生たちは応募のための準備を進めている。策定中のプロジェクトは実は、RPK の折に提出された二案ではなく、クリスマスマーケットとは何かを問うメディア活動であるという。「さなぎプロジェクト」応募にあたり、再度

検討しなおした結果、手回しオルガンの活用によ、クリスマスに関するディスカッションによ、それを行う場としての「クリスマスマーケット」なるものはそもそも何なのかという問いに、行きついたということなのかもしれない。以下、暫定的な企画案から骨子を抜粋する。

企画名 クリスマスマーケットについて広めるメディアづくり

- ・主旨：クリスマスマーケットについての冊子を作る。瓦版でもいい。
- ・方法：クリスマスを祝うことを文化としている国から来た人々に、クリスマスマーケットとは何かについて、語ってもらう。また、大学周辺に居住する人々や、中学生、高校生にも問いかける仕組みをつくる。インタビューを受けてくれる人々を募る。そのためのチラシをまく。近隣の店舗やコープ、大学生協、学科図書館、他大学、電力ビル、ラジオ、学校の放送部などにも協力を依頼。オープンキャンパスなどで配布。
- ・どこまでを学生の仕事とし、どこから先生方に頼むのか、考える必要がある。

このプロジェクトが、RPKで提示された二案と異なるのは、企画立案者における主体性のありようである。二案が、発案者である学生たちが枠組みからコンテンツまですべてを取り仕切る内容になっているのに対し、このメディアづくりの案では、枠組みのみを彼女たちが担い、コンテンツについてはほかの人からの情報提供にその多くを負っている。

気負いに任せて自分たちだけが走りまわるのではなく、人の助けを借り協同することによてこそ、社会性を帯びた真の主体性が生まれる。このことはそのまま、宮城学院の学生が実に伸び伸びと意見を述べていた、三大学交流会での二大学の役割分担を想起させる。弘前グループ、慶應グループの学生たちは、交流会の開催を前に、初顔合わせの仲間たちが気負ったり緊張したりしないように配慮しつつ、宮城学院の学生たちに問いを發し、語り手としての彼女たちを信頼する聞き手として、ディスカッション成立の前提となる暗黙の信頼関係をつくりあげていた。「あなたの話ならば何でも聞きたい」という構えの人が自分の目の前にいるとき、人は心を開いて語る、かもしれない（語らない可能性ももちろんある）。「さなぎプロジェクト」を企画立案中の学生たちもまた、自らの主体性を、他者の主体性と連動させる「インタビューア」としての立場を獲得しようとしているのが、あの交流会の直接的な影響をどの程度受けた結果なのかは分からない。第四回MGCMが成功裏に開催された頃合いに、尋ねてみたい。

末筆ながら、慶應義塾大学國枝研究室と、「弘前×フランス」プロジェクトのMGCMへの参加と交流会企画に、心から感謝の意を表す。オブザーバーとしてイベントに参加くださった釣馨先生、交流企画の実現のために諸々のアドバイスを下さった今中舞衣子先生にもお礼申し上げたい。イベント運営体制の改良にとっては、主催者としての学生の主体性にゆだねる姿勢が不可欠であるが、2014年の始動以来の開催目的すなわち大学の広報目的という「失敗できない事情」の制約の中にあて、大学の内側からその芽を育むためのアクションを起こすことができなかつた。今回実現した、手術台とミシンとこうもり傘の出会いにも似ためぐり合わせで成立した大学間交流が、何かの源流となて、イベントを本当の意味で有機的に成立させるかもしれない。数年後に見えてくる成果を楽しみに待ちたいと思う。そのためにも、学生が企画立案を担った「さなぎプロジェクト」が採択され活動が始まることが、MGCMの運営体制について、教員の意識改革すなわち学生の自発性、自主性を信頼し待つ姿勢の獲得によて、ひとつ契機となるよう願う。